

氏名（本籍）	申 ^{シン} 壽 ^ス 赫 ^{ヒョク} （大韓民国）
学位の種類	博士（美術）
学位記番号	博美第210号
学位授与年月日	平成20年3月25日
学位論文等題目	〈作品〉school、金町の化学工場であった空地で、stadium#2、stadium #3、庭園の側の学校、いつつの柱がある学校 〈論文〉流動する都市風景の間で—制作の背景をめぐって
論文等審査委員	
（主査）	東京芸術大学 教授（美術学部） 坂口 寛 敏
（論文第1副査）	鷹見 明 彦
（作品第1副査）	東京芸術大学 教授（美術学部） 保科 豊 巳
（副査）	” 准教授（ ” ） 小山 穂太郎
（ ” ）	” ” （ ” ） 光 井 渉

（論文内容の要旨）

本論文は、「流動する都市風景の間で」というテーマの下で行われた制作の背景についての論考である。私の作品は実際の建物や場所をモチーフにしているが、それは特定の場所に関係しながら、どこでもない別の時間軸を形成する場所としての風景を扱うものである。私にとって都市風景を素材に再構築された風景は、世界と自分をつなぐ通路であり、それは社会と歴史、他者と個人の様々なアレゴリーのなかで、日常と非日常の境界に立ち、瞬間と持続、時間軸の両面を横断する私たちの身体の時点を暗示する。その風景の断片を通して画一的な近代都市の空間を、感情や知覚の痕跡に満ちた親密な空間に変形させることで、夢と認識の間を往来しながら、日常に潜む新しい回路と遭遇することを求める。私の作品では、記憶と無意識に関わりながら、その背景から日常を構成する諸要素のシステムを抽出する作業が重要である。

それは、身のまわりの日常の風景がどのように成り立っているのかを問うことから始まる。私が日常を過ごす都市の姿は、人間の視覚を中心にした建築物の集合体であると同時に、場所本来の特性を失った近代空間の表象である。しかしこうした都市イメージは、日常的な体験を繰り返すなかで変化していく。場所と時間の変化とともに、その日常的な経験は非日常の風景と重なる。それは、私という存在が向き合っている社会的な状況、その個人を超えた経験が自分の居場所である都市空間のなかで再構築されるからであろう。こうした意味で自分が体験した都市空間を語るということは私の個人的な体験を超えるものとなり、より根源的な世界の風景と結びつく手がかりとなると考えている。

世界の風景は、私たち人間との無限な「時空間の関係」として現れる。しかしながら人工的な空間を示す現代の都市空間は、一方的な写像に満ちた記号のような風景に拡張され、時空間の関係からはなれた風景としてある。アートの領域で見れば、風景が西欧の近代の世界観の表象として、近代美術の胎動や建築に反映された後、総合的空間をなす建築の領域に関わる現代アートの試み（アースワーク）では、空間や場所の意味の読み換えが行われた。しかし、私にとっては、それはアートの問題にととまらず、自分が移動しながら偶然出会った場所（東京や上海の横丁、上海や東京の金町の空き地、上海や都内の庭園など）が無意識や記憶への遭遇を与えた体験によって、今の東アジアの都市風景に深く関わる現実の状況に映った。

そのような場所は、凡庸な日常でありながら、時間と時代の集積を感じるなかで、私の記憶と無意識の刺激に満ちた再発見の場となった。単線的な時間感覚から脱して、「流動する風景の断片」が見える場所に非日常性が感じられたことで、そこには、個人史や社会、時代、文化など様々な要素が複合的に交差し、感情や意識が沈澱していることを知った。この展開が私に与えたのは、場所の構造が成り立つ空間と身体の間で発生する「間」の感覚であり、宇宙の時間や身体に沈む意識の底の時間に対する自覚だった。

このような体験をモチーフに記憶の時間軸を媒介に制作する時、異なる時間軸の写像によって「再構築」される場所、いわゆる「非場所」が規定される。私の制作と作品は、「距離と交差」、「隙間と配置」、「痕跡と地平」、「断絶と空白」といった都市と場所をめぐる時空間の構造を基準にして、精神の内部に沈んだ未知の部分や瞬間の風景の可変性を伝える。すなわち、物質の存在感を強調するのではなく、流動する間と日常の断片を提示する。

芸術はその時代と社会の世界像の反映でもあるが、芸術家は反映に止まることなく、自分の内面を貫いた眼差しで世界を発見させる者である。その意味で日常も小宇宙として見れば、広義的な宇宙の秩序を含んで、社会の構造やシステムが改めて認識されるのではないかと考える。私の制作は、日常的に繰り返される生活での微妙な差異の発見、場所に対する感覚の反応、情報と無意識内に潜在する記憶、内面から発生する視空間感覚などを通して、「流動する風景の断面」を表現する。そのアプローチは、人間の居場所と関わりをもつ「身体」を媒介に日常性と非日常性を経験するなかで、存在の姿を再確認し、身体の時間へと戻る探求の過程であり、人間と時空間との関係に発生する芸術的創造の可能性への試みである。

本論文では、こうした制作の背景を、個人的な記憶と個人を超えた時代や歴史の流れと重なりの中に設定しながら、場所と人間、人間と場所の主客体間のインタラクティブな関係に発生する根源的なエネルギーのプロセスを中心に考察しようとする。